



被爆世界に語り30年

姉を失った岡田恵美子さん(79)

オバマ氏「今こそ広島学んで」 訪問実現

原爆の惨状を広島から世界へ発信し続ける被爆者がいる。原爆で姉を失つた広島市東区の岡田恵美子さん(79)だ。30年にわたって自らの体験を国内外で語り継ぐ一方、核保有国の首脳に対し、広島を訪れて被爆の実相に触れてほしいと訴えてきた。5月、原爆を投下した米国の現職大統領として初めてオバマ氏が広島に来たことを『核なき世界』実現へのスタート」とひらえ、若者たちへの語り部活動を続ける。

「私は夕焼けが大嫌い。広島の夜空を真っ赤に燃やしてこれ」とうめく声、防火したあの日を思い出して胸が苦くなるの」

2日、広島市中区の広島平和記念資料館。岡田さんは東京から平和学習で訪れた中高生約40人を前に講話をした。生徒たちは皆、熱心に耳を傾けていた。

8歳の時、爆心地から2・8キロの自宅で被爆。燃え盛る火の中、母親、弟と必死で逃げた。目玉が飛び出

た黒焦げの幼子、「殺し 爆で戦争は早く終わつた」と言い放った。

水槽に頭を突っ込んでいた死体…。当時の惨状を話せることが悔しくて「姉を大

死だつた姉は行方不明のまま、帰らぬ人となつた。自

身も被爆後、腹痛と嘔吐で死にさせないためにも、国境を越えて一人人と対話

しよう」と決意。以来、国内はもちろん、核保有国を

動けず、頭髪は抜け、歯茎から出血が続いた。現在も再生不良性貧血と闘う。

思い出したくなかった被爆体験を語り始めたのは1986年ごろ。被爆者の米国派遣事業に参加し、米国の平和運動家、故バー・ラ・レイノルズさんに出会った。レイノルズさんと一緒に集会所や学校、教会を回り、原爆の惨状について話した。当時は米ソ冷戦時代。米国人たちは核廃絶の訴えに聞く耳を持たず「原

島に学ぶスタートラインにしたい。各国の若者たちが手をつなぎ合って、核兵器廃絶へ行動を起こしてほしい」と願う。(御厨尚陽)

東京から来た中高生に講話をする岡田恵美子さん
112日午後1時、広島市中区の広島平和記念資料館

112日午後1時、広島市中区の広島平和記念資料館

した。当時のアッシュ・米大統領に「広島に来て、被爆者の話を聞けてほしい」と手紙を送った。北海道洞爺湖サミットが開かれた08年に参加各國の首脳に対し、その後、オバマ大統領にも手紙をつづった。オバマ大統領の訪問を目ので見届けた岡田さんは「世界の注目が集まつた今こそ、すべての人たちが広島に学ぶスタートラインにしたい。各国の若者たちが手をつなぎ合って、核兵器廃絶へ行動を起こしてほしい」と願う。(御厨尚陽)